

60歳代の人々の生活と意識

久木元 真吾

(公益財団法人 家計経済研究所 次席研究員)

1. 60歳代であることと「高齢者」イメージ

「高齢者」とは何歳からをさすのか、ということしばしば議論になる点である。官庁統計など、一般には「65歳以上」を高齢者として扱うことが多いが、少なくとも近年において、高齢者のイメージはより上の年齢をさすようになりつつあるようである。

例えば、2013年に実施された内閣府の「高齢期に向けた『備え』に関する意識調査」は、全国の35～64歳の男女2,707人を対象とした調査であるが、「一般的に高齢者とは何歳以上だと思いますか」という質問を行っている。その質問に対して、「60歳以上」「65歳以上」「70歳以上」「75歳以上」「80歳以上」と回答した割合は、それぞれ9.2%・22.1%・42.3%・15.1%・7.5%であった¹⁾。つまり、65歳（あるいはそれ以下）を「高齢者」の線引きとみなす意見は合計3割程度しか占めておらず、6割を上回る回答者は「高齢者」を70歳さらにはそれ以上の年齢の人だとみている。

また、2012年に行われた一般財団法人経済広報センターの「高齢社会に関する意識調査」でも、高齢者を70歳以上の年齢層と回答した人の割合は75%に達している。そして、高齢の回答者ほど、「高齢者」という言葉により高い年齢をイメージする傾向があるという。例えば、60歳代の回答者の場合、75歳以上の選択肢を選んだ割合は全体の52%を占めたのに対し、「60歳以上」「65歳以上」と答えた割合の合計は17%にとどまり、60歳代の約8割は自分自身を「高齢者」とは認識していないこ

とがうかがえる結果となっている²⁾。

実際、60歳代の人たちのあり方は、「高齢者」という言葉のイメージとは異なるものになりつつあるのも事実である。例えば、60歳などになって定年を迎えたら一切の仕事から離れるというあり方も、もう決して一般的ではなくなっている³⁾。2012年には「改正高年齢者雇用安定法」が成立し、60歳などで定年を迎えた社員のうち、希望者全員に対して65歳まで継続雇用する制度の導入が企業に義務づけられており⁴⁾、こうした動向からも、60歳イコール「高齢者」とはみなしにくくなりつつあるといえよう。定年退職して仕事はしておらず、孫がいて、悠々自適の生活を送るといった従来の高齢者のイメージと、実際の人々のあり方、特にかつてなら自明に「高齢者」に含められることが少なくなかった60歳代の人たちのあり方との間には、現在かなりのギャップがあるのではないだろうか。

ただ、「高齢者らしくない60歳代」ということだけなら、これも近年のものでは決してない。例えば、1993年の『朝日新聞』のある記事は、その年に還暦を迎える1933年生まれの男性の（架空の）語りを通じて、その時点での新しい60代像のイメージを描こうとしている。「先日の同窓会は楽しかったよ。集団疎開の仲間が還暦だなんて時の流れを感じたな。そういえば、うちの周辺も老夫婦だけという家が目立つ。女房は『いまや三越は“おばちゃんの本宿”よ』と言っている。……子供も巣立ち、年金暮らしとはいえ可処分所得は高い。形を変えたDINKS（共働きで子供のいない夫婦

図表-1 調査の概要

調査名	60歳代の生活と意識に関する調査
調査方法	インターネット調査
調査地域	全国
調査対象	60～69歳の、都市部居住者の男女個人 〔「都市部」＝都市規模20万人以上の都市〕
標本抽出方法	インターネット調査のモニターから抽出 性別×年代（60～64歳、65～69歳）＝4セルに均等に割り付け
回収数	2,098（依頼数：3,566、回収率：58.8%）
調査時期	2014年3月14日～17日

かもしれない」。これに続けて、同窓会での見聞として、事実婚や女性による介護や給食サービスの事業化、中堅企業の社長がめざす定年制の廃止などにふれて、「『80年代は女が東京を変えた。90年代は私たち60代が変えるのよ』と言っていたのは君の初恋の彼女だったっけ。ニューシクスティーズ（60's）か。同感だな」とまとめている（朝日新聞1999）。

このように、60歳代の人たちに、従来の高齢者イメージにおさまらないあり方を見いだすこと自体は、約20年前の記事にもみられる。ただそこで描かれているイメージは、現在の60歳代の人たちにおいて実現されているものかという点、簡単にはいえない。例えば、「子供も巣立ち、年金暮らしとはいえ可処分所得は高い」といった描写は、どこまで一般的なものといえるか議論の余地があるだろう。60歳代の人たちは、従来の高齢者イメージにおさまらなくなりつつあるのだとしても、どのように「おさまらない」のだろうか、また別の面では「おさまっている」点もあるのだろうか。そして実際にはどのような生き方・暮らし方・考え方をしているのだろうか。

以上のような問題意識のもとに、公益財団法人家計経済研究所は、60歳代の人たちを対象として、その現在の姿を明らかにすることをめざす調査（「60歳代の生活と意識に関する調査」）を2014年に実施した。本稿では、この「60歳代の生活と意識に関する調査」について、その概要を解説した上で、特に自由記述の質問への回答について議論を行い、「高齢者」というよりは、一種のはざまの時期を送る人たちとしての「60歳代」の現在の

姿を描き出すことにしたい⁵⁾。

2. 調査の概要

(1) 調査の概要

この節では、「60歳代の生活と意識に関する調査」（以下「本調査」）の概要について説明する。本調査の調査方法はインターネット調査であり、株式会社インテージに委託して2014年3月14日～17日に実施された。したがって、回答者は調査時点で同社でモニター登録をしている人である。

調査対象の条件は、60～69歳の男女で、日本全国の都市部居住者（ここで「都市部」とは、都市規模20万人以上の都市をさす）とし、モニターの登録属性から抽出した。抽出に際しては、性別と年代（60～64歳、65～69歳）の4セルで均等になるようサンプルの割り付けを行う形で、回答を依頼した。本調査では目標回収数を2,000に設定したが、最終的に得られた回収数は2,098（男性1,046、女性1,052）であった。回収数（2,098）を依頼数（3,566）で割った回収率は58.8%である。以上をまとめたのが図表-1である。

なお調査内容は多岐にわたるが、60歳代の人が誰とどのような関係を取り結んで生活を過ごしているかが一つの主要な焦点である。そのため、配偶者・子ども・親・友人・近隣のそれぞれとの関係についてたずねており、他にも仕事の状況・居住・日常の行動・健康状態・意識・収入と貯蓄などについても質問している。

(2) インターネット調査であることの影響

本調査について注意が必要なのは、本調査がインターネット調査によるものだという点である。しばしば指摘されるように、インターネットを利用したモニター調査の回答者は、訪問留置調査など従来の手法の場合に比べて、収入や学歴が高く、専門的技術職が多くなる傾向がみられるという（萩原2009）。また、インターネット調査のモニターに登録している人は、インターネットを日常的に利用している人が多いことが予想されるため、本調査が対象としている60歳代の人たちの、

図表-2 回答者の年齢の分布

性別	60 歳	61 歳	62 歳	63 歳	64 歳	65 歳	66 歳	67 歳	68 歳	69 歳	合計	n(人)
男性	9.4%	8.9%	10.1%	9.8%	12.0%	15.0%	13.8%	9.3%	5.8%	5.9%	100.0%	1,046
女性	9.4%	10.6%	9.7%	10.4%	10.7%	15.6%	13.1%	8.9%	5.3%	6.3%	100.0%	1,052
全体	9.4%	9.7%	9.9%	10.1%	11.3%	15.3%	13.4%	9.1%	5.6%	6.1%	100.0%	2,098

図表-3 回答者の学歴の分布

性別	年齢	中学校	高校	専門学校、 各種学校	短大・高等 専門学校	大学	大学院	わからない	答えたく ない	合計	n(人)
男性	60～64 歳	2.1%	26.9%	4.6%	3.2%	60.4%	2.1%	0.0%	0.8%	100.0%	525
	65～69 歳	1.9%	30.7%	3.8%	4.0%	54.7%	3.1%	0.2%	1.5%	100.0%	521
女性	60～64 歳	1.1%	40.8%	8.1%	24.0%	23.4%	1.5%	0.2%	0.9%	100.0%	534
	65～69 歳	2.7%	45.6%	8.1%	20.7%	21.0%	1.2%	0.2%	0.6%	100.0%	518

インターネットの一般的な利用状況にも注意を払う必要があるだろう。

総務省の「通信利用動向調査」(2013年)によると、過去1年間のインターネットの利用経験をたずねた質問に対して、「利用経験あり」と答えた人の割合は、60～64歳で76.6%、65～69歳で68.9%であった(男女別にみると、男性は60～64歳・65～69歳でそれぞれ83.1%・75.0%、女性はそれぞれ70.1%・62.9%)。この「利用経験あり」は、過去1年間の利用経験を大まかにたずねた結果であり、実際の利用頻度がかかなり少ないケースも含まれていると考えられる。したがって、60歳代でインターネット調査のモニターに登録している人という本調査の回答者は、多く見積もっても同世代のコーホートの7割以下、実際にはおそらく5割以下のグループに属する人たちであると考えられる⁶⁾。つまり、本調査の回答者は、60歳代の人として代表的な人たちとはいえ、パソコンやインターネットに慣れた、ある程度限られた層であることは確かであろう。以下の議論は、この点をふまえてのものとなる。

60歳代の人たちを対象としたインターネット調査であることは、実際の回答者の属性にどのような特徴をもたらしているのだろうか。続けてその点について検討する。

(3) 回答者の属性

ここでは回答者の属性、特に、年齢・学歴・経

済状態について概観する。

まず、回答者の年齢についてみてみよう。本調査の回答者の年齢は、調査時点で60～69歳であるが、男女別に各年齢での人数の分布を示したのが図表-2である。68歳・69歳は男女とも人数が顕著に少なくなっていることがわかり、留意する必要がある。65歳の比率がやや高くなっているのは、上述したように、年代を60～64歳と65～69歳に分けて均等に割り付けたため、68歳・69歳で比率が少なくなっている分を、65歳や66歳で埋め合わせるようになったからだと考えられる。

ただし、調査時点で68歳・69歳のコーホートは、戦後直後の生まれのため、国勢調査のデータで見ても、他と比べて人数がやや少なくなっている。また、65歳を含むその後のコーホートは、戦後のベビーブームにあたる、いわゆる「団塊の世代」に相当し、60歳・61歳などのコーホートと比べても人数が多くなっている。その意味で、本調査の回答者は、国勢調査データと比べて、あくまで大まかにではあるものの、実際の各年齢コーホートの人数の分布にみられる傾向はゆるやかに保持されているといえるかもしれない。

次に、回答者の学歴についてみてみよう。図表-3は、回答者の最終学歴を性別および年齢(60～64歳と65～69歳)別に分けて集計したものである。注目されるのは、大学(4年制大学)を卒業した人の割合のきわだった高さである。男性では5割を超え、特に60～64歳では6割を上回っている。

図表-4 回答者の貯蓄額の分布

	有配偶		無配偶	
	男性	女性	男性	女性
50万円未満	6.3%	4.4%	19.0%	11.4%
50万～100万円未満	2.8%	1.9%	7.2%	3.5%
100万～300万円未満	5.7%	4.5%	10.5%	4.7%
300万～500万円未満	6.5%	4.3%	4.6%	6.7%
500万～700万円未満	5.3%	3.6%	4.6%	5.1%
700万～1,000万円未満	4.1%	4.3%	2.0%	5.9%
1,000万～1,500万円未満	6.8%	7.0%	2.6%	5.5%
1,500万～2,000万円未満	6.6%	6.4%	2.6%	3.9%
2,000万～2,500万円未満	4.8%	4.0%	3.3%	2.8%
2,500万～3,000万円未満	3.9%	4.3%	5.2%	4.3%
3,000万～3,500万円未満	4.0%	3.0%	3.9%	2.0%
3,500万～4,000万円未満	2.7%	1.6%	2.0%	0.8%
4,000万～4,500万円未満	1.6%	1.4%	0.0%	2.8%
4,500万～5,000万円未満	2.0%	1.6%	2.0%	1.2%
5,000万円以上	9.3%	7.8%	7.8%	3.9%
答えたくない	18.0%	21.7%	17.0%	26.4%
わからない	9.5%	18.3%	5.9%	9.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
n (人)	893	798	153	254

女性の場合でも2割を軽く超える割合になっている。「平成22(2010)年国勢調査」によると、60～64歳・65～69歳の人たちでの大学(4年制大学)を卒業した人の割合は、男性はそれぞれ24.9%・19.7%、女性は6.3%・4.2%であった⁷⁾。ただ国勢調査のデータは4年前のものであることから、本調査と国勢調査を比較する場合、国勢調査については近いコーホートとして55～59歳・60～64歳の人たちと比べる方がいいという考え方もありうるだろう。そこで55～59歳について国勢調査のデータをみると、男性は30.4%、女性は9.6%であった。どの値で比較するにせよ、本調査の回答者における4年制大学の卒業生の割合が非常に高いことは確かであろう。

最後に、回答者の経済状態についてみてみよう。既に退職した人も少なくないことから、経済状況を推し量ることができるものとして、ここでは収入ではなく、貯蓄額と暮らし向きについての回答をとりあげる。

貯蓄額⁸⁾についての回答状況は、性別に加えて配偶別(有配偶/無配偶)でも分析してみた。その結果が図表-4である。これをみると、「答えたくない」「わからない」の割合が多いため割合

図表-5 現在の経済的な面での暮らし向きについての回答状況

	有配偶		無配偶	
	男性	女性	男性	女性
大変苦しい	5.2%	4.3%	15.7%	7.1%
やや苦しい	20.0%	14.5%	26.8%	24.0%
ふつう	47.3%	51.5%	36.6%	46.1%
ややゆとりがある	24.7%	26.4%	17.6%	20.9%
大変ゆとりがある	2.8%	3.3%	3.3%	2.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
n (人)	893	798	153	254

の数値の評価は難しいが、それでもある程度の傾向はうかがえる。有配偶では、500万円さきみでみると一番多いのは500万円未満で、次が500万円以上1,000万円未満である。それ以上の貯蓄額の人割合は、金額が高いほど、おおむねゆるやかに少なくなっていく。しかし、最高額のカテゴリーである「5,000万円以上」を選んでいる割合が、男性および有配偶女性で高く、経済的にかなり豊かな層がある程度回答者に含まれていることがうかがえる⁹⁾。ただし、有配偶と無配偶で比べると、男女とも無配偶で貯蓄額の少ない人の割合がきわだって高くなっており、回答者全体が等しく豊かであるわけではないことも、あわせて確認しておくべきであろう。

もうひとつ、現在の経済的な面での暮らし向きをたずねた質問をしている。その回答状況を、性別・配偶別にまとめたのが図表-5である。これをみると、無配偶で「苦しい」という回答の割合が大きいことがわかる(有配偶では「大変苦しい」「やや苦しい」を合わせて男性・女性それぞれ25.2%・18.8%であるのに対して、無配偶では42.5%・31.1%にまで達する)。中でも無配偶の男性では、「大変苦しい」の割合が15.7%と顕著である。全体として、本調査には経済的に豊かな層が多く含まれている傾向がうかがえるものの、決して余裕があるとはいえない層も(特に無配偶で)少なくないことがわかる。

3. 自由記述にみる60歳代の意識

(1) 質問項目について

本調査では、調査項目全体の最後に、「今の生活

図表-6 自由記述で用いられている単語(男性)

(60～64歳)			(65～69歳)		
語	ケース数	割合	語	ケース数	割合
生活	68	19.2%	生活	60	17.2%
健康	46	13.0%	健康	58	16.6%
不安	33	9.3%	不安	37	10.6%
年金	22	6.2%	人生	17	4.9%
将来	14	3.9%	年金	17	4.9%
自分	13	3.7%	仕事	14	4.0%
心配	11	3.1%	趣味	13	3.7%
仕事	11	3.1%	維持	11	3.2%
			病気	11	3.2%
			子供	11	3.2%

注: 1)「ケース数」は、自由記述の内容にその語が含まれていたケースの数

2) 60～64歳のケース数は355、65～69歳のケース数は349(いずれも、具体的な記述があったもののみ)

3)「割合」は、それぞれのケース数に対する、その語が含まれていたケースの割合

4)「割合」が3%以上のもののみを掲載している

やこれからの生活について、お考えのことをご自由にご記入ください」という、自由回答の質問を設けている。これ以上の記載は一切なく、回答者が自由に考えを述べるができるようになってきている。もちろん、無回答の人や、「特になし」などとして具体的な記述が一切ない人もみられるが、それは少数派であり、全体で男性は67.3% (704ケース)、女性は82.5% (868ケース) の回答者が、何らかの具体的な回答をしている。ここでは、この質問に対してなされた自由記述を手がかりに、いささか断片的かつ仮説的にではあるが、60歳代の生活と意識の現在について考えていくことにしたい¹⁰⁾。

(2) 言葉の頻度

まず、自由記述のテキストデータから、単語ごとの出現ケース数および全体に対するその割合を、男女別および年齢カテゴリー (60～64歳/65～69歳) 別に集計した (図表-6、図表-7)。これは、個々の単語がどのくらいの割合で自由記述の中で用いられているかを示している¹¹⁾。

これはあくまで単語の出現頻度を調べたものであり、例えば「不安がある」という記述であっても「不安がない」という記述であっても、「不安」という言葉が等しく出現したとしてカウントしているため、この集計結果だけから過度の解釈に踏

図表-7 自由記述で用いられている単語(女性)

(60～64歳)			(65～69歳)		
語	ケース数	割合	語	ケース数	割合
健康	95	21.3%	健康	102	24.2%
生活	94	21.0%	生活	86	20.4%
不安	72	16.1%	不安	59	14.0%
自分	40	8.9%	元気	31	7.4%
心配	37	8.3%	心配	28	6.7%
子供	27	6.0%	子供	23	5.5%
年金	26	5.8%	自分	20	4.8%
介護	23	5.1%	将来	20	4.8%
老後	19	4.3%	夫婦	16	3.8%
仕事	18	4.0%	迷惑	16	3.8%
将来	17	3.8%	年金	16	3.8%
元気	16	3.6%	夫	15	3.6%
夫婦	15	3.4%	病気	15	3.6%
			家族	14	3.3%
			趣味	14	3.3%
			幸せ	14	3.3%
			孫	13	3.1%
			仕事	13	3.1%
			介護	13	3.1%

注: 1)「ケース数」は、自由記述の内容にその語が含まれていたケースの数

2) 60～64歳のケース数は447、65～69歳のケース数は421(いずれも、具体的な記述があったもののみ)

3)「割合」は、それぞれのケース数に対する、その語が含まれていたケースの割合

4)「割合」が3%以上のもののみを掲載している

み込むことには慎重になる必要がある。しかしそれでも、一般的な語彙である「生活」が多いのはともかく、「健康」「不安」「心配」「年金」「子供」といった言葉が上位にみられることから、大まかに60歳代の人たちの関心の所在がうかがえる。これを参考にしつつ、以下では具体的な記述をとりあげて考えていく。

(3) 「このまま」・「維持」・「考えない」

自由記述全体を一読すると、「今の生活やこれからの生活」について、現在の状態を続けていければいいという声が多いことに気づく。現状に大きな問題や不満がない中で、それ以上を求めることなく、このままの状態が続いていくことをシンプルに望むというわけである。いくつか例示しよう。

「できるだけ現状を維持して生活したい」(69歳男)

「今の生活を維持して健康に注意して働けるうちは頑張っていきたい」(61歳男)

「夫婦二人とも元気なのでこの状態を維持していきたい」(64歳女)

「このまま今住んでいるところに住んで楽しく過ごせればいいと思います」(62歳女)

「今のままの経済状態と健康が続けられればいいと思う。贅沢はしないし、身の丈に合った生活を続けて平和に穏やかに生きていきたい」(63歳女)

「今のままで十分幸せです。これからも健康である限り、きっと不満はないと思います」(68歳女)

しかし、はっきりと述べないまでも、今後時間の経過を経ても、そうした現状の維持や継続が見込めるかどうか、確信が持てないニュアンスがにじむ声もみられる。

「このまま、のんびりと生活できればうれしいが」(63歳男)

「現在は比較的平穏な生活をしているが、この先もこのまま生活していけるのかがやや心配である」(64歳男)

「今が楽しく過ごせているので、このまま時間が止まればいいのに。私たちが死んだ後の子供が心配」(62歳女)

ただ、将来についての不透明感があつたとしても、「考えない」あるいは「なるようになる」と述べる例もある。これには、「なるようにしかならないから、考えても仕方がない」という消極的なニュアンスのものもあれば、「あれこれ考えて不安を感じていても仕方ないので、今を大事にしたい」という積極的なニュアンスのものもある。

「考えると不安なので、あまり考えないでいる」(63歳女)

「体があまり良くないのであまり考えない様になっている」(67歳女)

「今の生活が精一杯で、先のことを考えないようにしている」(63歳男)

「成るようにしか成らない、あれこれ考えてもしょうがないでしょう」(68歳男)

「なるようにしかならないし、なるようになる。不安の先取りはしない」(69歳男)

「不安はあるけれどなるようになるあまり考えていない」(60歳女)

「先の事は余り考えない……クヨクヨしても仕方が無い。人生はなるようにしか成らない」(66歳女)

「あまりネガティブに物事を考えないようにしている。人生いつどのようなことに遭遇するか考えても意味がない。生かされていることに感謝して毎日を送るように努めている。生きていられるだけで満足していると考えようになっている」(63歳男)

「なるようになる！今を大切に生きていたら未来は開けると思う。今に不安を持って生きていたらもったいない。今出来ることを精一杯生きたい」(62歳女)

ただ、よりはっきりと「不安」や「心配」について述べる例も少なくない。そうした例を、続けて検討しよう。

(4) 不安・心配

図表-6および7にみたように、本調査での自由記述に登場するキーワードとして、出現頻度が多いものの一つが「不安」である。これに「心配」をあわせて、「不安・心配」のいずれかがあると言及されている回答は、何らかの具体的な回答がなされていた1,572ケースのうち18.0%（男性13.1%、女性22.0%）を占めていた。

不安・心配の内容は、漠然とただ不安であることを述べるものから、より具体的なものまで幅広い。特に経済面（年金・収入など）と健康面の不安・心配を述べるものが目立つが、仕事、住宅、自然災害、日本の社会や政治・経済の将来などに至るまで、多岐にわたる記述がみられる。

まず、男性の自由記述からみてみよう。

「将来、年金だけの生活は不安（住宅ローンが80歳までであるので）、貯蓄があまりないので」(65

歳男)

「消費税増税や年金受給額の減額などで、生活が年々苦しくなっており将来については経済的な不安が大きい」(63歳男)

「自身は引退・カミさんはパートをもうすぐやめる。あとは年金だけで生活。社会情勢で貧困生活は目に見えている。将来は不安だが今を楽しく生きるしかない」(62歳男)

「将来介護が必要になった時にどうするかが心配」(66歳男)

「現在は一人暮らしで健康であるが、これから認知症など意思疎通ができなくなることに不安を感じる」(65歳男)

「自分の生活より、今の日本の政治状況及び社会状況に不安を感じる」(66歳男)

次に女性の自由記述である。

「これからの生活に漠然とした不安を抱きながら日々過ごしている」(62歳女)

「世の中が目まぐるしく変わっていくので、変化について行けるか不安です」(62歳女)

「定年後 何の仕事につけるか不安」(60歳女)

「いまはまだ働いているのでいいが1年後に退職してからの生活と親の介護のことが心配です」(67歳女)

「現在は配偶者が働いているが、何時働けなくなるか判らないので、今現在毎日不安」(66歳女)

「我々の生活や経済的な不安は少ないが息子たちの経済的な不安がある。年金生活後の特に長男一家の今後の経済援助が負担になると思う。働けなくなった後、健康で居られればいいが貯蓄をなし崩しにしていく生活は不安でしかない」(65歳女)

「老後も今の家に将来も住み続けられるか不安」(66歳女)

「車がないと生活できない土地に住んでいるので、車に乗れなくなったとき不安」(62歳女)

「自分がいつまで健康でいられるか、持病があるのでとても不安に思う」(60歳女)

「主人も私も沢山の病を抱えているので、先が

不安」(61歳女)

また、子どもや周囲との関係とからめて不安を述べる例もある。子どもがいてもいなくても、同居していても、自身が独身であっても、不安や心配につながりうるようである。

「子供がいないので、将来一人になった時、相談できる相手がいなくなるので不安を感じる」(60歳女)

「子供が男ばかりなので年をとった時に話し相手になってくれるか不安」(62歳女)

「同居している娘夫婦ですが、やがて自分が老いて行く状態を受け入れてもらえるのか不安です」(64歳女)

「一人ぼっちになるのが怖い。至って健康なので、長生きしそうで、その時には、親しい人はみんな鬼籍に入っているだろうし、その時の孤独を考えると怖い」(66歳女)

このように、将来の不安や心配を語る例は多く、その対象も多様である。しかし、そのことは逆に言えば、今まさにそうした不安や心配の只中にいるわけではないということでもあり、だからこそこれから起こりうることへの不安・心配として語られている。1節でふれた約20年前の新聞では、「年金暮らしとはいえ可処分所得は高い」というイメージで描かれた60歳代であるが、いわば「悠々自適」な生活を送ることは、今日の日本社会においては決して簡単なことではないのかもしれない。あるいは、より正確に言えば、たとえ現在「悠々自適」であり不安や心配がないとしても、だからといって将来の不安や心配まで消えるわけではない(むしろより不安や心配を強めうる)ということ、これらの自由記述は示しているのかもしれない。

(5) 孫・子

家族関係の面でみた場合、高齢者のイメージとして、「孫の存在」はしばしば挙げられるものの一つである。自由記述においても、孫に言及する例はいくつか見ることができる。

「孫の成長を楽しみにしている」(66歳男)
「孫が今年また増える予定なのも楽しみの1つです」(68歳女)
「出来れば孫の顔も見たいと思っている」(65歳女)

孫の成長と誕生は喜びと楽しみであり、まだ孫のいない人にとっても「出来れば顔を見たい」思いがあるという回答がみられる。遠くに住んでいるため会えないことへの残念な思いがあれば、積極的に孫の世話にかかわっている(かかわりたいと思っている)姿もある。

「孫と遠く離れていてなかなか会えないので、娘夫婦が一日も早く近くに転勤してくれることを願っている」(65歳女)

「まもなくリタイア時期なので、孫の世話を中心に、好きな事をやりたい」(62歳男)

「娘が育児休暇が終わり、4月から孫達が保育園に。頑張っている娘の負担が少しでも軽減できるように係わっていきたい」(65歳女)

しかし、何らかの形で孫について言及した回答は、必ずしも多いわけではない(男性で13ケース、女性で25ケース)。特に60～64歳に限定すると、男女あわせて13ケースにとどまっている(うち1ケースは「孫がほしい」というもの)。「今の生活やこれからの生活について、お考えのこと」という質問内容のため、孫よりも他の話題の方が想起されやすいためともいえるが、そもそも本調査では、60歳代前半では孫がいないケースが過半数を占めている¹²⁾ためとも考えられる。

これに対して、子どもに言及した回答は多い。ただ、既に子どもたちが就職・結婚などで独立しているケースはもちろん多々みられるが、そうではないケースも少なくない。例えば、子どもがまだそこまで大きくないケースである。上で「孫の成長が楽しみ」という例があったが、「子供の成長が楽しみ!」(60歳男)というように、まだ子どもこそがこれから成長していく存在としてみられている(そのくらいまだ小さい/若い)例もある。

「子供がまだ中学生ですから、成人してから(もし私が生きていれば)考えましようか」(62歳男)
「年金だけでは暮らせない将来に悲観している。息子の大学進学を考えると悩みは絶えない」(60歳男)

あるいは、既に子どももそれなりの年齢になっているが結婚していないという例も、未婚化・晩婚化の進展の中で珍しくなっている。若者が歩むライフコースのあり方が単一的でなくなりつつあることに伴って、親世代の経験もまた単一的ではなくなっているのである。同じ60歳代でも、孫の世話をする人もいれば、次のように子どもが結婚していないことが気にかかる人もいるのが現在の社会の姿である。

「子供の自立、結婚が心配」(63歳男)
「結婚していない2人の子供を早く結婚させたい」(64歳男)

「未婚の子供を早く結婚させること」(68歳男)
「同居している独身の子供たちが結婚をして、子供を持ってくれることを強く希望しています」(65歳女)

「子供の結婚を願っている。一度は結婚してほしい」(69歳女)

「40過ぎ二人の独身息子の行く末が気がかり」(68歳女)

さらには、さまざまな困難に直面している子どもがいるケースもあり、その将来への不安を吐露する例もみられる。

「子供の将来(娘;無職であるので生活できるか心配)」(61歳女)

「子供がひきこもりなので将来を心配している」(66歳女)

「発達障害で引きこもりの息子の将来が非常に不安であるが、どうすることもできない」(65歳男)

「孫がいる」、あるいは「子どもが巣立っている・自立している」といったことは、少なくとも現在

の60歳代の人たちにとって、誰もが実現できるもの・実現し終えているものではないことが、こうした自由記述から浮かび上がってくる。

(6) 親

次に、60歳代の人たちとその親に注目する。

高齢化が進む中で、60歳代の人たちにとって親が存命であることは珍しくなく、将来親を介護することになった時を心配する声もあるが、現在親の介護の真っ最中であるケースも少なくない。当事者として介護を語る例は女性の方が多いが、男性の例もないわけではない。

「100歳の義母を一人で介護中だが、この先義母がどうなるかそれだけが気になる」(69歳女)

「今は親族3人の面倒をみること それが生きる目標」(66歳女)

「今、老老介護の真っ最中、これが何時まで続くか」(64歳男)

「別居の母親の介護(週6日泊りに行っている)妻の介護(日常の買い物をしている)自分の自由な時間があまり取れない 母親の介護は、施設等に任せたい」(66歳男)

介護の負担感を語る例も、同様にみることができる。体力的な負担という以上に、時間的な拘束の大きさや終わりのみえなさが負担感を生んでいくことがうかがえる。そして介護の経験から、自分の子どもには同様の経験をさせたくないという思いを吐露する例もある。

「自分の時間が欲しい。義理の母と自分の親の介護の負担が重い」(61歳女性)

「今は介護があり自由な時間が全くありません。いつかそれも終わりが来ると信じてそれからの楽しいことをひたすら考えています」(62歳女)

「現在は100歳の実母の介護で苦労している。肉体的にも精神的にも限界が近付いていると感じる」(61歳女)

「高齢の母親の介護が大変なうえにこれからの老老介護が心配。自分が義理の父、母の介護で大

変な思いをしてきたので子供たちに自分のような苦労はさせたくない」(65歳女)

「子どもの巣立ち」「孫の誕生」といった言葉が想起させるかつての60歳代(あるいは高齢者)のイメージは、仕事であれ生活であれ、一線を退いた存在というものだったかもしれない。しかし現在の60歳代の少なくない人たちは、親の高齢化と介護という課題の、まさに最前線の担い手となっており、決して一線を退いているわけではないことがわかる。

(7) 「迷惑」と「自立」

もう一つ、ここで取り上げたい言葉が「迷惑」である。図表-6や図表-7では、65～69歳の女性の場合以外には図表中に表れていないが、60歳代の意識を考える上で、一つのキーワードであると考えられる。男性の自由記述ではそれほどみられないが、女性の自由記述ではより多くみられる言葉である。

「健康に過ごして人に迷惑を掛けない様にした」(65歳男)

「健康第一、人に迷惑をかけないような人生が送ればよいと思う」(68歳男)

「他人に迷惑をかけることなく、自家の畳の上で天寿を全うしたい」(69歳男)

「健康に気をつけて家族に迷惑をかけずに生活していきたい。経済的にも、依存せずに生きていけるように考えている」(60歳女)

「健康に注意して子供達の迷惑にならないようにしながら人生を楽しみたい」(66歳女)

「1人の生活なので健康に問題がおきた時、子供には迷惑をかけたくない。子供との同居は双方にとって面倒がおきると思うので、なるべく避けた」(61歳女)

「介護を受けなくてはならなくなったり、痴呆、寝たきりなど家族や娘に迷惑をかけずに今の幸せを保ったまま、ある日ポックリと死ぬ事が理想」(65歳女)

以上のように、健康を維持することによって、子どもや周囲の負担を増やさずに生活していきたいという思いを表現する際に、「迷惑」という言葉が用いられている。同様の趣旨で、「社会や家族の負担になりたくない」(64歳男)のように、「負担」という言葉が用いられることもある。また、「頼る」という言葉を用いて、「病気になっても、子供たちを頼ることはしたくないので、夫婦でお互い助け合いながら暮らし、介助の必要なことにはならないようにしたい」(67歳女)と述べる例もみられる。「迷惑」や「負担」をかけたくない相手、頼らずに済ませたい相手としては、子どもだけでなく、近隣や社会までも挙げる例がみられる。

この意向をより積極的に表現する場合は、「自立」という言葉が用いられる。できるだけ長く自立した生活を送りたいという語りは、具体的な内実があるというよりは、子どもなどに頼らず、迷惑をかけず、負担にならないでいたいという思いを表現する言葉の一つであると考えられる。

「いつまでも自立して他人の手を借りずに生活したい」(60歳男)

「子供に頼ることがないように自立して、夫と仲良く暮らしていきたい」(67歳女)

「人生の最後まで自立した生活がしたい」(66歳女)

「元気なうちは向上心を忘れないで、自立した親でいたい」(65歳女)

興味深いのは、親世代の介護を経験している場合でも、あるいはボランティアなどで他の人の支援にかかわっている場合でも、そのことが将来自分自身が子どもに介護されることを望んだり当然視したりすることにならず、またボランティアの支援を受けることも想定しないという点である。自分はする側であっても、される側にまわることには想定していない。それは、介護や支援を受けることを忌避する・拒むというよりは、相手にそういうことを強いることが相手の「迷惑」になりうるから、という思いによるものと思われる。また、時代の変化の中で、自分の世代でやらざるをえな

いこと・やっていることと、後の世代がやるべきことを区別して捉えていることの表れでもあろう。

「今は地域のボランティアなどしている立場だが、これから先はそんな人も少なくなるので、自分がしてあげられるうちだけで、自分は子供にも頼ることなく生活しなくてははいけないと思う」(61歳女)

「今の世の中、子供に頼ってはかわいそうなので、極力世話をかけないようにしたいと思っています」(66歳女)

「これから先」は同じようにはならないだろうし、「今の世の中」は昔のようなやり方では無理が生じる。このような納得の仕方を通じて、何かに頼ることをできる限り回避しながら生きていこうとする志向が、60歳代の人たちの語りからうかがえるのではないだろうか。

4. おわりに

——60歳代という「はざま」の位置

以上、具体的な自由記述の事例をとりあげながら、検討を進めてきた。

簡単にまとめるならば、現在の60歳代の人たちは、複数のライフステージの交錯の中にあり、かつてならば別々のライフステージで経験することを、いわば同時に生きているといえるのではないだろうか。「現役一定年退職—リタイア」といった明確な段階の区別はもう失効し、子どもとの関係も、親との関係も、「一段落」したものにはならないままである。仕事や子育てといった、前のライフステージの要素がなくなりきらないまま、同時により高齢の親世代のケアもあり、むしろ60歳代よりもさらに先にこそ、別のライフステージ(真の(?)高齢期・要介護状態……)が控えているとイメージされるようになってきているのが現状ではないだろうか。その意味で、「現役」であれ「老後」であれ、明確なライフステージの段階的な区別を前提にした概念は、どれもその有効性を失いつつあると考えられる。

こうした60歳代の姿は、現在の日本社会において、ライフコースを各「〇〇期」の段階的移行プロセスとして考えることが無効になりつつあることを示している。単なる高齢期とはもう言えず、より後のステージを前にしつつ、以前のステージの要素も負いつけている、「はざま」の時期が60歳代なのではないだろうか¹³⁾。

60歳代の人たちの言葉に、「不安」と「自立」の両方の要素がうかがえるのは、まさに「はざま」に立っているからだと考えられる。ことさらに「自立」を志向しなくても安定した立場にいられることはもうなく、確かなライフステージがもうない中で模索しているからこそ、将来への不安も、自立への志向も生まれてくるのであろう¹⁴⁾。「はざま」の位置に立ちながら、既存のイメージに回収しきれない新しいあり方を模索しているのが、60歳代の人たちなのではないだろうか。

注

- 1) 以下のURLを参照：<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/kenkyu/zentai/pdf/s3.pdf>
- 2) 以下のURLを参照：<http://www.kkc.or.jp/data/release/00000075-1.pdf>
- 3) 2005年のデータであるが、67歳でも男性の約6割が就業しているという調査結果があり（ニッセイ基礎研究所2007: 15-16）、現時点ではその割合はさらに高くなっていると予想される。
- 4) 2013年4月から施行されている。
- 5) 本誌次号にも、この調査の結果について分析した論文を掲載する予定である。
- 6) 電通総研DENTSUデジタルシニア・ラボの2012年の調査では、60歳代のインターネット利用率（メール送受信を含む）は57.0%（男性58.7%・女性55.3%）で、パソコンでのインターネット利用率にしぼると37.3%であったという（<http://www.dentsu.co.jp/news/release/pdf/cms/2012046-0410.pdf>）。
- 7) ここで「大学（4年制大学）を卒業した人の割合」は、「平成22年国勢調査」のデータ（産業等基本集計の第10-2表）をもとに、各年齢層ごとに「大学（4年制大学）を卒業した人数÷（卒業者数-卒業者（不詳））」として算出した割合である。他の計算方法もありうるが、ここでの議論（本調査の回答者の学歴の高さ）には大きく影響しないと思われる。
- 8) この「貯蓄額」は、預貯金、有価証券などすべて含むものとして尋ねて得られた回答である。

- 9) なお、日本経済新聞社産業地域研究所編（2013）には、全国の65～70歳男女を対象に行われた2つのインターネット調査の結果がまとめられているが、同様の質問に対して、5000万円以上を選んでいる割合は9.6%・11.7%となっており（「答えたくない」などを含めずに算出した割合）、60歳代のインターネット調査として、極端な結果になっているわけではないと予想される。
- 10) 以下、この質問項目への回答を一般的に呼ぶ際は、単に「自由記述」とする。
- 11) 実際には「する」「なる」「思う」といった単語の頻度も多いが、ここではキーワードを探索するという観点から、名詞に限定して集計している。
- 12) 本調査で、回答者全体に対する孫がいる人の割合は、60～64歳では、男性35.2%・女性46.8%といずれも過半数に満たない。65～69歳では、男性58.0%・女性60.2%である。
- 13) こうしたライフステージの移行過程の変容は、同時により若い世代においても起こっているといえる（久木元2009）。
- 14) これも、より若い世代とパラレルな現象だと考えられる（久木元2011）。

文献

- 朝日新聞, 1999, 「時代を変えるのはニューシクスティーズ 主役は若者から60代」『朝日新聞』1月1日付朝刊。
- 久木元真吾, 2009, 「若者の大人への移行と「働く」ということ」小杉礼子編『若者の働きかた——叢書・働くということ 第6巻』ミネルヴァ書房, 202-227。
- , 2011, 「不安の中の若者と仕事」『日本労働研究雑誌』612: 16-28。
- ニッセイ基礎研究所, 2007, 『定年前・定年後』朝日新聞社。
- 日本経済新聞社産業地域研究所編, 2013, 『団塊シニアの諸相』日本経済新聞社産業地域研究所・日本経済新聞出版社。
- 萩原牧子, 2009, 「インターネットモニター調査はどのように偏っているのか——従来型調査手法に代替する調査手法の模索」『Works Review』4: 8-19。

くきもと・しんご 公益財団法人 家計経済研究所
次席研究員。主な論文に「生命保険の社会学」（藤村正之編『いのちとライフコースの社会学』弘文堂, 2011）。社会学専攻。（kukimoto@kakeiken.or.jp）